

再び伊勢神宮式年遷宮の起源について

——田中卓氏の批判に答う——

下 出 積 与

は し が き

一、持統朝起源説——田中氏説一の概要

二、奈良時代における式年遷宮の古伝の吟味

(1) 天平元年・天平十九年の遷宮

(2) 和銅二年の遷宮

三、持統朝起源説の吟味

四、天平神護二年の遷宮

五、桓武朝起源再論

は し が き

私は昨年、「古代学」誌上において『伊勢神宮式年遷宮の起源』について私見の批判を乞うたことがある(同誌四卷二号)。

小論の意図するところは、伊勢神宮の式年遷宮は天武朝に創るといわれている通説を再吟味せんとするところにあつた。その結果、通説の論拠はいずれも曖昧であつて、おそらく平

安時代の中期前後になつて神宮側から唱導されたものではなからうかと推定したのである。この通説の論駁だけで実は小論の意図は達せられたのであるが、式年遷宮が嚴然たる事実として存在する以上、その起源はやはり明かにすべきであると思ひ、それについては桓武朝起源なる試見を提出しておいた。

伊勢神宮そのものは日本史上重要な意義を有する存在であるが、小論の取扱つた対象はその中のごく小さな問題にすぎなかつた。更に私の未熟さはささやかな論証にしか終始し得ず、問題をますます些小なものにしたのである。にもかかわらず最近田中卓氏が『神宮における式年遷宮の起源』なる高論を「神道史研究」誌上に展開せられ(同誌四卷三号)、小論に對し痛烈な批判を下された。早速御惠贈いただいた高論を讀んだのであるが、正に拙論は木葉微塵に粉碎されてしまつ

たといつても過言ではない。とるに足らぬ拙論をこれほどまでに懇切に批判されたのは、まことに望外の喜びとしなければならぬ。史観・方法論の問題は別として、氏の御教示により正さなければならぬところが多々ある。と同時にくり返し読ませていただいたが直ちに承服したい点もまた多い。これらは私信によつて解決すべきかとも思つたが、氏が反論を公表された上はそれに対する答も公にするのが礼であると思ひ、不本意ながらかかる形をとつた。

なお前稿發表後直ちに反駁の筆をとられた田中氏に対し、私は生来の選筆のため今日まで再論の遅くれたことの御寛恕を乞いたい。

一、持統朝起源説Ⅱ田中氏説Ⅱの概要

田中氏の論は次の三部から構成されている。

(一) 桓武朝起源説―私見―の批判

(二) 奈良時代における式年選宮

(三) 式年選宮の立制―持統天皇朱雀三年説

(一)(二)(三)すべてに亘つてであるが、とくに(一)は専ら小論に対する批判にあてられてゐる。その論旨はほぼ三つに分れるであらう。まず桓武朝起源の私見においていくつかの論拠を提出しておいたのであるが、そのほとんどをとるに足らぬものとなし、僅に皇太神宮儀式帳による延暦四年選宮の論のみを採上げられる。そしてこれ以前に史料が見出されないにしても

「その歴史家は式年選宮の確実な史実は、少なくとも延暦四年にまで溯ることが出来、それ以上は、古伝による他はないと叙述すべきであつて、直ちにそれを式年選宮の「最初」と決めてかかることは妥当でない」と教示された。次は桓武朝立制が事実であるならば、何故に延暦儀式帳や続日本紀にその記載がないのであらうかと質される。これについては前論にも触れたのであるが、それを強弁と斥け「なぜ儀式帳にも入っていないのであらうか、と、むしろ自説の反省材料にこそ用いらるべきものと思はれる」とされた。また私が通説の批判に書紀に天武朝立制の記事のないことを指摘したのを、氏はここで適用されて、統紀に桓武天皇立制が脱漏したとするならそれは批判の空転であり、むしろ自己撞着を来す結果になつてゐるとも断ぜられるのである。最後の論点は日本後紀弘仁三年六月辛卯条の

神祇官言、佳吉香取鹿嶋三神社、隔廿箇年、一皆改作、積習為常、其弊不少、今須除正殿外、随破修理、永為恒例、許之、

についての解釈である。この条については田中説と併せて後節で再び考察しようと思うが、要するにこの記事に現れる「積習」については、時間的に久しいという字義通りの意味ではなく、おそらく政治上の必要から他の三神に対して実質の伴わない名目上の待遇に終らせるための神祇行政当事者の苦悩が、ことさらにかかる誇張の語を使ひしめたものと考え

たのに対し、『もしこのように、自説を任意に前提として、それに都合の悪い史料を容易に別の意味にすりかえてしまうというような方法が許されるならば、なるほど一切の論証は天馬空をゆくがごとくであらう』ときめつけられ、私見を強弁と排せられた。で結局、私見には何ら見るべき積極的な根拠がなく、むしろ卒直に神宮側の古伝に従うべきであるとして(二)に進まれる。

(二)は神宮側の古伝、主として太神宮諸雜事記と二所太神宮例文によられて奈良時代の式年遷宮について考察されている。そして神宮所伝の和銅二年・天平元年・天平十九年・天平神護二年の二回から五回に至る遷宮が式年に行われたのは事実であるとされるのである。このように奈良時代に式年遷宮が行われたとする氏の論理は、その起源を第一回の持統天皇即位四年以前に求められるのは当然で、(三)はその部分の論証である。ここにおいて氏は上記のように神宮所伝の古伝は正しいという態度を基本線として通説の吟味に当られる。そして通説という白鳳十四年乙酉説と同十三年庚寅説はいずれも誤りであつて、流布本太神宮諸雜事記にいう朱雀三年説が正しい。しかもこの朱雀三年は持統天皇の二年戊子であつて、この年に式年立制が定められたとするのである。²⁾

以上が田中説の概要であるが、起源を持統朝とされる点において通説の天武朝と分れる。しかしこれは氏自身もいわれる通り、若干年代の差異があるだけであつて、時間的に嚴密

に言えば通説と異なるけれどもその歴史的意味においては天武持統朝と總括される如く殆んど通説と交りのないものである。これは氏が『恐らく、持統天皇が、夫君天武天皇の崩御後、かつて共に苦勞せられたあの壬申の乱の想い出を偲び、今は亡き天武天皇と御自身の神宮に對し奉る厚き御信仰を、改めてここに式年遷宮立制という具體的な形として結実せしめられたものであらう』といわれておることからも明かである。従つて田中氏の朱雀三年説はやはり通説と同じ範疇で把握すべきものである。この意味において、仮令年次を持統朝とするとはいへ私見と全く相對立すること、通説の場合と些かも交りがないとすべきであらう。

註

(1) 統紀に延暦四年の遷宮關係記事の脱漏していることについて、

田中氏はそれは恐らく延暦當時において一般にそれほど意識的に、重大な意味を以て考えられていなかつたものではなからうかというふうと考えておられる。そして更にその意味として『それは、むしろ関心を引かないまでに制度自体が一つの伝統と化してゐたためではあるまいかという考へ方が、おのづから導かれてくるであらう』とされた。この後半の意味づけは大いに異論のあるところであるが、前半の解釈はおそらく妥当であらう。私は前稿において桓武説を強調するあまり、統紀脱漏について確に考察をおろそかにした。従つて桓武朝起源の意義と統紀の記事脱漏との間に論理的な連関が欠けていたのは事実である。この点については田中氏の御教示に従ひ、後文において補

考したい。

(2) 田中氏が朱雀三年即持統天皇二年戊子説を提唱されたのは、小論に対する反論が最初ではない。昭和三十年十一月に「イセ神宮の創始」(神道史研究三卷六号)なる論文において世に問われたのが初めてである。しかし当時は前掲稿の完了後で既に古代学協会で印刷中であつたため、これに言及し得なかつたのは遺憾であつた。と共に田中氏に対しても申訳ないことと思つてゐる。故意に無視したのでないことを御了承願いたい。

二、奈良時代における式年遷宮の古伝の吟味

本稿は田中氏に答えるのが差当つての任務であるから、氏の立論の順に従うのが原則であるが、他に起源問題の再論の意味も含んでゐるので若干順序の倒錯するところもある。まず私見に対する氏の反論への考察であるが、これはその大部分を後節に譲つてここでは左記のことについて考えてみたい。

先述の如く私は前稿において桓武朝起源の論拠の一つとして、皇太神宮儀式帳の「新宮遷奉御装束用物事」の条に

宝物殿十九種、

金銅櫛二基、

右延暦四年宮遷時、依御帳、
宣符録に上解文、即被供納。

とあるのを挙げ、その分註の「延暦四年宮遷」を式年遷宮について最も信憑性のある最初の史料としたのである。ところ

がこれに対して田中氏から「しかし、この延暦四年が、最初」の遷宮であるかどうかは、必ずしも確実でないのであつて、それが最初であることを断定するためには、それ以前には決してありえなかつたという積極的な論拠が必要であらう」という叱正をいただいた。私の前稿には延暦四年以前の式年遷宮、即ち奈良時代におけるそれについての考察はない。しかしそれは神宮所伝の奈良時代の遷宮については論ずる必要がないと認めたからであつた。だがその理由等については一言も言及しなかつたのであるから、田中氏の上記のような叱正があつても止むを得ない。立論の未熟さは汗顔の至りである。で、氏の御教示に従つてここでは奈良時代における式年遷宮の古伝について吟味しよう。

奈良時代の式年遷宮の古伝というが、それは統紀やそれに類するものにあるのではなく何れも神宮側の所伝であることはいふまでもない。即ち主として太神宮諸雜事記(以下諸雜事記といふ)と「所太神宮例文(以下例文といふ)」にいうところである。それによれば延暦四年(七八五)の遷宮は第六回であつて、それ以前には持統天皇即位四年(六九〇)の第一回から和銅二年(七〇九)天平元年(七二九)天平十九年(七四七)を経て、天平神護二年(七六六)の第五回に至るまで行われていたといふ。ところで周知の如く諸雜事記は平安中期、例文は鎌倉末から南北朝にかけての成立といわれているのであるから、この神宮所伝を直ちに受入れることが危険な

のは詳言するまでもあるまい。しかし一應田中氏に従つてこの所伝を基礎にして考えると、延暦四年の前の第五回遷宮は天平神護二年である。これが事実であるという田中氏の論は、第一節で触れた日本後紀弘仁三年六月辛卯条の解釈が積極的論拠であるので、それ以外は神宮側の古伝がこの年の遷宮を伝えているのを疑うべき根拠がないといわれているにすぎない。即ち神宮所伝についていえば、氏自身なら史料批判を加えておられないのである。にもかかわらず何故に疑うべき根拠は見出し得ないと論断されるのか了解に苦しむところであるが、これについては弘仁三年の条と併せて再論すべきことが多いので、後節において考えたい。

(1) 天平元年・天平十九年の遷宮

第三回と第四回の式年遷宮はそれぞれ天平元年と天平十九年に行われたことになっている。田中氏は神宮の古伝に従つてこれを認められるのである。もちろん従来の説の如く、またさきの天平神護二年の時のように單に古伝に盲従するといふのではなく、精緻な考察を加えられた結果である。しかし遺憾ながら私はそのまま賛同の意を表するわけにはいかな

い。

氏の主張の論拠は二つある。第一は年代についてである。第五回遷宮の天平神護二年（七六六）より正確に廿年を溯つて行くとそれぞれ天平十九年（七四七）神龜五年（七二八）和銅二年（七〇九）となる。ところが神宮の古伝に従うと天

平十九年と和銅二年は一致していて問題はないが、中間は天平元年（七二九）となつていて算定上の式年たる神龜五年より一年ずれている。つまり和銅二年より廿一年目となつており、従つて次の天平十九年の遷宮は天平元年より十九年目と一年早くなつてゐる。このような年代のずれは式年という立前からいへばまことにおかしいことで、後世より奈良時代の式年遷宮を作爲したものとなれば一年のずれを故爲に造作する必要はない。だから年代のずれが生じているということは後世の造作としては考えられないことで、かような年代の不自然さが見える点にこそ、神宮の所伝が當時をそのままに記録したことを証するものであるとされるのである。

式年は明確に廿年一度と規定されているのであるから、それが廿一年になつたり十九年になつてゐることは確におかしい。造作したとすれば、かかる不合理な点こそ数字的に正しく造作されるべきである。にもかかわらずそうしたおかしなことがそのまま記述されているのであるから、神宮の所伝は當時のものであり、従つて天平十九年と天平元年にはそれぞれ式年遷宮が行われたという田中氏の論は一應もつともである。しかしこの年代のずれということが当時の記録であるという論拠は、果してそうとばかりいい切れるであろうか。氏の論は、換言すれば合理的な推定年代よりずれた年代を記録しているものはすべて正しい所伝であるということになる。書紀において天皇・皇子の生歿年からその親子関係につ

いていろいろの問題がある。それは合理的に考えられる範囲を逸脱しているものが多い。これは改めていうまでもなく學界自明のことになつてゐるが、これも年代のずれがあるから後世からの作為が入つてゐるのではなく、かえつて当時のままの所伝であるといえるであらうか。式年と人間の生存可能年代ということでは数字的に問題を對比することは一見無謀のようではあるが、後者といえどもおおよそその枠は決つてゐるのであつて、ただ年代のずれが一年という短期間であるかあるいは數年以上であるかという差にすぎない。また古社寺にはそれぞれ多くの縁起類を有するが、一々の例証をあげるまでもなく、それらの中には他の信憑性の高い記録と年代のずれてゐるものが多い。これも年代がずれてゐるからこそ正しい所伝であるということになるであらうか。だから年代のずれてゐるということには、田中氏のいわれるような場合もあるであらうが、また後世からの作為が入つてゐるからこそずれが生ずる場合もかえつて多いのである。従つて氏のように切ることにはかなりの危険があると思う。

このようにいうと、かえりみて他をいう如き論証と反論されるかもしれない。そこで神宮側の所伝をいま一度吟味しよう。式年選宮をよく伝える神宮所伝は諸雜事記と例文である。年代のずれに關して最初にとりあげられた天平十九年度は兩書ともこれを記録してゐる。この年は天平元年を基準とすれば田中氏のいわれるように十九年目であるが、天平神護

二年より溯れば丁度廿年前に當る。また第二回といわれる和銅二年度は兩書とも伝えているので、これは第一回という庚寅年より廿年目に當る。氏のように逆算の方向からだけ考えれば十九年目が天平元年、廿一年目が和銅二年と造作者は二度までも誤算をしたということになるが、上記のように兩方からしほつて行けば問題は第三回といわれる天平元年度だけになる。これが前年の神龜五年であればすべてが算定上一致するわけであるから、誤算はただ一回ということになるのである。このようにみえてくると、かりに氏の論法に従つても結論にはかなりニュアンスの違いがでてくる。即ち二度の誤算は考えられないが、一度ならばあるいは造作者の計算遠いという場合も想定されたであらう。

しかもこの年數の相違は平安時代以後のように絶対的な端數が生ずるものでなく、第一回から第六回の延暦四年の間がきれいに廿年目毎の倍數に整例されてゐるのである。延暦四年以後元享三年（一三三三）に至るまでの間、廿九回の式年選宮が行われてゐるが、その間正確な式年に外れたのは三回だけであつて、他の廿六回は嚴重に守られてゐる。即ち三回とは廿六年目の弘仁元年（八一〇）廿一年目の嘉祥二年（八四九）十九年目の仁和二年（八八六）であつて、三者の差を相済しても六年という端數がでてくる。南北朝時代に至る數百年間で廿六回まで式年が守られてゐるのであるから、この枠外に出ることを極力避けたことはいうまでもあるまい。平

安末期に仮殿遷宮が式年間に⁽²⁾行われても、それを基準とせず前の式年々度によつてゐるのであるからこのことはよくうかがわれる。しかし三回の式年の年数のずれをどこかで恢復しようとしている点はみえない。殊にその三回とも平安朝廷の一応隆昌期と考えられる初期に属するので、公家勢力の衰えたためとは思えない。こうしたことは式年立制があつたにしても、それが伝統化されていなかつたがために現れた現象なのか、あるいはまた一度々々の遷宮に重点を置いていて式年を起源の年に合わせようとしなかつたかのいずれかではあるまいか。とにかく平安時代以後は年代の遡進を廿年の倍数に合わせようとはしていないのである。しかも平安以後において式年遷宮の実施されてゐたのは明らかである。これをもつて奈良時代の式年をみると、天平元年度に一年のずれがあるがそれは直ちに直後の遷宮において修正され、全体を通じて見事に廿の倍数に整理されてゐるのである。このようにみると、年代のずれは必ずしも神宮所伝の信憑性を高めるもののみとはいえないと思う。

ところで天平元年遷宮の伝であるが、これは例文に

天平元年、^{己巳}、内宮（御）遷宮、^{御式}、自和銅二年及廿一年、（第廿六）所太神宮正遷宮臨時仮殿遷宮次第

と明記しているが、諸雜事記には、ただ

天平元年九月、二所太神宮御神宝等、^不使、右中弁、同

九月十三日、參宮、（第一聖武天皇案）

とあるのみで遷宮かどうか明瞭ではない。もつとも田中氏は純日本後紀に

遣左少弁從五位上文案朝臣助雄等、奉神宝於伊勢大神宮、

是廿年一度所奉例也、（嘉祥二・九・丁巳条）

とあることや、類聚国史に

貞觀十年九月七日丁酉、遣從五位下守右少弁藤原朝臣千

乘、左大史正六位上刑部造眞鯨等於伊勢太神宮奉太神財

宝、是隔廿年所造也、（卷三、伊勢太神）

とあることをもつて、勅使による神宝奉納は遷宮のためのものであることを現す。しかも両度とも式年遷宮のそれであるから、諸雜事記にいう天平元年の神宝奉納は正に式年遷宮を指すものであるとされている。このように解すれば天平元年の遷宮は諸雜事記にも記されてゐることになり、両書とも一致することになる。しかし神宝奉納即遷宮という解釈が果して唯一のものであろうか。なるほど氏の挙例されたものはいずれもそのことを示している。そしてその限りにおいては誤りではない。しかしその例をもつて直ちに諸雜事記にあてるとは、私には二つの疑点がある。その一つは諸雜事記は十一世紀中葉頃までの遷宮を記載しているが、その間脱漏しているもの（嘉祥二・貞觀十・延喜五・延長二・応和二）を除き他はすべて明瞭に「太神宮御遷宮」と遷宮の文字を明記しているのであつて、神宝奉納と表現しているのは天平元年唯一回だけ

である。何故にこの時に限つてかかる間接的な表示法をとつたのであるのか、理解に苦しむ。またかりに天平元年のが遷宮を現すとしても、その論拠となるのは嘉祥二、貞観十年といずれも九世紀後半の事例である。天平元年は八世紀の前半であつて、その間に一世紀以上の距離がある。九世紀後半において神宝奉納即遷宮と解されるからといつて、それを直ちに一世紀以上溯らせて適用することが妥当であらうか。可能性は認められるにしても、そのみをもつて直ちに断定することはやはり避くべきであらう。第二の疑点は九世紀において必ずしも神宝奉納が遷宮を意味するものばかりでないということである。即ち田中氏の挙げられた外に伊勢神宮に神宝の奉納された事例は

イ、大同二年（八〇七）八月癸亥、遣使奉神宝并唐国信物於伊勢太神宮、（類聚国史卷三、伊勢太神）

ロ、承和五年（八三八）冬十月戊子、遣左兵庫頭從五位上國野王等、奉神宝於伊勢太神宮、（続日本後紀卷七）

ハ、貞観十二年（八七〇）九月八日丁巳、遣正五位下守左中弁源朝臣直、右大史正六位上広階宿禰八鈞於伊勢太神宮、

奉神宝、（三代実録卷十八）

ニ、元慶二年（八七八）三月七日癸卯、遣使奉伊勢太神宮幣并神宝弓楯劍等物、（同書卷卅三）

を数えることができる。いずれの場合も勅使を派遣して神宝を神宮に奉納されるのであつて、氏のいう遷宮の際に実施さ

れた神宝使と少しも異つたところはない。しかもこの四例とも式年遷宮や臨時遷宮とは全く年代が合わないものであるから、これらの神宝使は遷宮とは全然関係がないものといふことができる。これをもつてみれば神宝奉納は必ずしも遷宮を意味しないのであつて、他の場合に発遣される例も多いといわねばならない。イは同時に唐国からの信物を納めるのであり、ニは他に幣弓楯劍等を伴つてゐるから純粹な神宝使といえないと反論されるかもしれないから、かりにこれを除いたとしても、ロ、ハは田中氏のあげられた嘉祥二・貞観十年の場合と全く一致する。してみれば九世紀においても神宝使には二つの意味があつたわけで、なにも遷宮に限られてゐるわけではなかつた。このように多様に発遣される神宝使の一種だけをとりあげて、これを遷宮に係するものと断じ、更にその前提を一世紀以上も溯らせて天平元年に充當するのは穩当ではなからう。ここでは氏の論拠に基いて九世紀だけの神宝使について考察し、その一方性を述べたのであるが、同じことが実は八世紀の天平年間においてもいえるのである。即ち統紀の天平十年（七三八）五月辛卯条に

使右大臣正三位橘宿禰諸兄、神祇伯從四位下中臣朝臣名代、右少弁從五位下紀朝臣宇美、陰陽頭外從五位下高表太、廣神宝奉于伊勢太神宮、

とあるのを、さきのロ、ハに比べればこれが全く同一の事象を指すものであることがわかる。しかも天平十年が式年遷宮

の年次に当らないことはいうまでもない。そしてこの年は諸雜事記にいう天平元年よりおくれること僅か九年であるから、八世紀前半の頃においても神宝奉納が何れも遷宮に限定されるものでなかつたということは、九世紀後半の頃と些かの変わりもないことになるのである。更にこの時の神宝使が右大臣以下神祇伯・陰陽頭と律令政府の最高層に属するものであるので、天平元年のそれが僅か右中弁の官にすぎないものであることを思うと、神宝使發遣は式年遷宮に限定されると解される田中氏の論とこの点においても矛盾を生じてくるであらう。とにかく氏の論拠とせられた九世紀後半の事例においてもまた天平年間のものにおいても、神宮への神宝使は何れも遷宮に限定されるものでなかつたということは明らかである。従つて諸雜事記の天平元年の記事を遷宮のみを意味するとされる態度には、にわかに賛同し得ないのである。

これらの疑点が解明されない以上、諸雜事記には無条件に従うわけにはいかない。しかも同書には神龜五年の記事を欠き遷宮に触れるところがないのであるから、神宮所伝において天平元年の式年遷宮を明確に伝えるのは前掲の例文のみとなる。ところで前稿で述べた如く本書は鎌倉末から南北朝にかけて成立したものであつて、いま問題としている八世紀より数世紀後のものである。しかも管見の範圍内では同書の奈良時代關係記事の信憑性を論証したものを見ないから、まず一般のいわゆる縁起類と同等の取扱ひをするのが史学の常識

であらう。私は以上の諸点から天平元年の式年遷宮の施行に疑念をもつものである。

次は氏の第二の論拠の吟味に移る。氏は神龜五年と天平十八年の兩度に亘つて斎宮寮の整備拡充が行われたことを採上げ、これはそれぞれ翌年にひかえた式年遷宮の準備のためのものである。そして式年遷宮の施行を認めない限りは、斎宮寮の拡大の史実を理解することはできないといわれるのである。

寮昇格の年次の問題については註の如く直木・田中氏の間で論が分れるが、両氏とも神龜五年が斎宮にとつて重要な時期であつたとされる点には変りがない。だから問題を田中氏の第二の論拠にしぼるならば、いづれにしても大した相違はないことになる。で問題を当面のものに限定しても、私には少なくとも氏の論拠には三つの疑点があるのである。

第一の疑点。統紀の神龜四年八月壬戌条に

補斎宮寮官人一百廿一人、

とあるのであるから、神龜四年から五年にかけて斎宮寮の拡大充実がみられたことは間違いない。しかしこれが直ちに翌天平元年に行われたという式年遷宮に結びつくかどうかは問題である。氏の言は

これは、その翌年にひかへた式年遷宮に備へて、斎宮寮の拡充整備せられたことを容易に推定せしめるものであつて、もし然らずして、これを全くの偶然といふならば、それはあまりにも偶然にすぎ

るであらう。(同氏論文三四頁)

と、斎宮寮が起点となつて論旨が展開されるのではなく、あくまでも天平元年に式年遷宮があつたということが前提となつて、神亀四・五年の事態が導かれてすることに注意しなければならぬ。即ち寮の拡大整備の記事は直接何も式年遷宮を証してはいないのである。だから問題はやはりもとの天平元年の遷宮そのものところへ歸つてくる。ところが既に述べたように、天平元年式年遷宮の神宮所伝中、最も信憑度が高いと思われる諸難事記の記事については、いろいろの解釈がなし得るのであつて、必ずしもこれを式年遷宮のみに限定することはできない。してみればかかる所伝をもとにした史実は一つの仮定にすぎないか、あるいはある可能性を示すものとしかいいえないと思う。従つてかかる仮定の史実を前提となし、その上に築かれた結論は更に仮定の度を深めるものといわなくてはならない。神亀五年の斎宮寮の拡大は、天平元年式年遷宮の事実が実証されてはじめてこれに結びつくのであつて、寮の拡大が事実であるからといつて、それは決して式年遷宮が事実であるということにはならない。神亀末年から天平初年にかけての斎宮寮拡大の意味について、直木氏は、長屋王の時代から藤原氏への推輟期に當つていることと無関係ではないのではないかと、試論を提出されたが(註(4)参照、むしろこの方に背筋に當るものを覚えるのである。

第二の疑点は第一のことにも関連するのであるが、何故に

斎宮寮が拡大充實されたかの意味のとり方についてである。前にも触れたように田中氏はこれについて

奈良時代の中期にあつて、斎宮寮がそれ自体として、あるいはその拡充整備に關聯して、明瞭に史上に特筆される時期は、実に神亀五年と天平十八年の二度である。しかもその年次こそは、それ／＼天平元年・天平十九年といふ神宮側史料の伝へる式年遷宮年次の、あたかも前年に當ることに注意しなければならぬ(同氏論文三三一三四頁)。

と、式年遷宮をその唯一の意味にとられているのである。ところで神宮所伝の奈良時代における式年遷宮は持統四・和銅二・天平元・天平十九・天平神護二年の五回であつて、天平元年と同十九年は中間の三・四回目にあたる。してみれば斎宮寮は三・四回の遷宮の時に限つて拡大整備されたということになる。氏の所論がもし正しいとするならば遷宮と斎宮は不可分の關係にあるわけであるから、他の一二五回の時は斎宮が史上に特筆されないのは一体どういうわけなのであろうか。五回目の天平神護二年の時は前回の天平十九年で充分に斎宮寮が整備され、その補強の必要を認められなかつたから史上に現われなかつたとも考えられるので一応除外しても、一二回の時はどうしても説明がつかない。また三・四回と引續いて拡大されているから、四回目は三回目より異つた規模で実施されたのであろうか。と同時に最初の拡大のみられた天平元年は和銅二年よりも規模が大きくなつたことになる

が、何故に天平元年の時に限つて從來にみない重要な制度の充実が行われねばならなかつたのであろうか。氏の所論はこれらの疑問を一向に解いてはくれない。更に不審な点は、書紀・統紀の伝えるところが正しいとすれば、天武天皇の二年に伊勢神宮に派遣された大来皇女が、持統天皇の朱鳥元年（六八六）に京師に還つてからは（天武紀同年四・己巳、持統同年十一・壬子条）、文武天皇二年（六九八）に当香皇女が發遣されるまでの十余年間は（統紀同年九・丁卯条）神宮に斎王は存在していない。その不在期間中に第一回の還宮（持統四年）が行われたということになるので、氏の還宮斎宮關係の所論と矛盾することになるのである。

また斎宮寮設置年次についての田中説がもし正しいとすれば、それが司から寮へ昇格した時期は神龜五年でなく大宝二年頃となる。この司から寮への昇格は制度上最も重要なものの一つで、公法上よりみれば單なる擴大である神龜五年や天平十八年のそれよりはるかに重要な意味をもつものであることは改めていうまでもなからう。しかも大宝二年は第二回といわれる和銅二年の式年に先立つ七年前であつて、これをもつてその準備にあつたためのもとはまず考えられない。してみれば斎宮寮（司）の擴大整備は必ず式年還宮と関連づけて考えねばならないということにはならないのである。

天平十八年のことは、統紀に再び

置斎宮寮、以從五位下路真人野上為長官、（同年八・壬

寅条

とみえることからその擴大整備が推定されたのであるが、これは田中・直木兩氏の論考で明らかにされた如くおそらく事實であらう。しかしその意味は、田中氏の拠つておられる諸雜事記の奈良時代に關する記事の史料批判が充分に行われていない以上、やはり直木氏の說かれる如く、天平年間において伊勢神宮の著しい發展がみられ、國家神としての内容がますます充實してきたことに伴つてとられた措置であると解するのが穩当であらう（岡氏前掲論文下ノ上）。思うに田中氏は、斎宮寮の擴大整備が式年還宮の傍証になるといわれるが、それは式年還宮があつたという神宮所伝をまずあくまでも信んぜられるがために、寮のことを逆にそれに結びつけられるという思惟方法をとられたのではあるまいか。

第三の疑点は主として神龜五年の斎宮寮についてである。この年の斎宮寮の整備は大宝二年のものがここに擴大されたのではなく、この年に司から寮に昇格したのであることは註（4）で述べたとおりである。統紀にこのことを脱漏しているのは周知のとおりであるが、同年条をみると次のごときいくたの注目すべき事象にぶつかる。

イ、是日、始授外五位、仍勅曰、今授外五位人等、不可帶此階、隨其供奉、將叙內位、宜悉茲努力莫怠、（五・丙辰条）

口、是日、勅始置內匠寮、頭一人、助一人、大九一人、

少九二人、大属一人、少属二人、史生八人、使部已下雜色匠手各有數、(八・甲午条)

ハ、又置中衛府、大將一人、位上、少將一人、位上、將監四人、位上、將曹四人、位上、府生六人、番長六人、中衛三百

人、位上、使部已下亦有數、其職掌常在大内、以備周

衛、事並在格、(同前条)

イは官位制度の改変であり、ロ・ハは共に新官庁の設置を示すものである。なおハについては類聚三代格に更に詳しい格文がのっているが(巻四、加減諸司官員并魔置事)、これは神龜五年當時のものでない(笹山晴生氏が論ぜられたのでここで参照する必要はなからう(中衛府設置に関する類聚三代格所載勅について)「続紀研究二卷九号」)。しかし笹山氏の否定せられたのは三代格の日附であつて、中衛府設置が神龜五年にかかることは承認しておられる。ところでロ・ハで新設された内匠寮と中衛府であるが、前者は中務省の被官で宮中内外の工匠製作のことや儀式等の際する當膳を司る官庁であり、後者は天平神護元年改定新設された近衛府・外衛府とならんで(「続紀同年二・甲子条」、奈良時代を通じて天皇身邊、官廷の直接の警衛に當つた重要な府である。こうした重要な意味をもつ官庁がそれぞれ神龜五年に開設されたのであつた。なお

勅
大学寮

律學博士二人 直講三人

文章學士一人 生廿人

以前、一事に上同勅博士、(類聚三代格卷四)

の勅がやはり神龜五年七月廿一日に出されており、また貞觀十三年十二月廿七日の太政官符によれば

去神龜五年初置律學為正七位下官、(同書卷五)

と、新官庁の開設ではないが、既設官の中において新しい職と分野の設置を圖つてゐることがわかる。また「続紀神龜五年八月壬申条の

太政官議奏、改定諸国史生博士醫師員升考選叙限、史生大國四人、上國三人、中下國二人、以六考成選、滿即与替、博士醫師以八考、成選、但補博士者、惣三四國而一人、醫師每國補焉、選滿与替、同於史生、

というのも同様の趣旨としていいであらう。このようにみると、神龜五年を中心にして律令官制全体が大きく整備されんという動きの中にあつたということが推定されるのである。またイは前引八月壬申条の官位叙限にも関係するが、要するに内外五位をもつて高卑姓を分たんというので、いわば令の官位制の取扱方に一つの大きな修正を加へんとしたものということが出来る。その詳細については三代格にのせるが(巻五定内外五位等級事)、それによると、位祿・位田・賜物・位分資人・蔭子・父妻の取扱ひに至るまで、内外位によつて大きな差をつけようとしたものであることがうかがわれ

る。延暦十二年正月六日の勅にもこの格をひいて同内容のことを伝えてゐるから（同書卷五）、官人社会にとつてはいかに大きな影響をもつたものがわかるであらう。つまりこれらは直接官位に關係する服務内容に至るまで規定を加へんといふのである。三月廿八日に出された。

勅、諸国郡司五位以上相う逢当国主典以上者、不問貴賤皆悉下馬、如有官人於本部逢国司者、同位以下必須下馬、不然者揖而為過、其有故犯者、内外五位以上錄名奏聞、六位以下決杖六十、不得贖贖、（類聚三代格卷七、郡司事）

なる勅も同趣旨の働いてゐるものであらう。その他統紀にのせる同年三月丁未・同月甲子・四月辛卯の諸条などいづれもイに通ずる精神に貫かれてゐるのである。

神龜五年とは正にかくの如き年であつたのである。官制そのものにおいて、官人の服務・制度の内容においてかかる改革の加えられた年であつたので、一斎宮寮の昇格だけが特筆大書されるべき時期ではなかつたのである。それならば、このような大きな変革が神龜末年を中心にみられるのをなんと解したらいひのであらうか。直木氏はさきに「定見は持ち合はせないが、この時代が長屋王の時代から藤原氏への推輟期に當つてゐることと無關係ではないのではないか」（前掲論文「中」続紀研究二卷六号）といわれたが、おそらくこれは同氏が問題を斎宮寮にだけ限られたからかかる表現をとられたと思

考する。これは上記の如く相關連する事項に對象を求めるならば、正しくこれこそこの推輟期なるがために現われた事象であるといつていいであらう。思うに、地方にあつては律令制の矛盾がそろそろ露呈しはじめ、中央においては貴族相互間の權力争奪が次第に激しくならんとしつゝあつた。天武朝に絶頂に達した皇親政治の衰えを再び既往にかえさんという聖武天皇を中心とする動きが、こうしたいくたの官制の改廢などとなつて現われたものと思う。田中氏は式年遷宮の施行といふことを認めなくては斎宮寮の擴大を理解することはできないといわれたが、神龜五年の寮昇格の史実はい勢神宮の範圍内でのみ解すべき事柄ではない。それは聖武朝全体の動きにおいて、律令制の絶頂期にかえさんとの種々の官制改革、綱紀肅正の一環として眺めてこそはじめて充分の理解がつくのである。直木氏に従えば、天平頃から伊勢神宮の發展が著るしくなるといふ。これも上記のことの必然の現われなのであつて、要するに斎宮司の寮への昇格は聖武朝前期の政治刷新の一つの象徴と考えられる。換言すれば、式年遷宮の有無とはかわりなしに斎宮司は寮に昇格したものである。上來、断片的にしか触れることのできなかつた天平十八年の斎宮寮について、ここで一言附加しておきたい。統紀の八月壬寅条の

置斎宮寮、以從五位下路真人野上為長官、

が斎宮寮の新設を意味するのではなく、その擴大整備を示す

ものであるというのは田中・直木両氏のいわれるようにおそろく事実であろう。しかしこれを田中氏の如く翌天平十九年の式年遷宮のための準備と解するには、やはり一、二の疑点が存する。

その一はかつて直木氏も指摘されたことであるが（前掲論文「下ノ上」続紀研究二卷十一号）、天平元年の式年遷宮のために拡大整備された斎宮が、ひきつづいて何故に天平十八年にも拡大されねばならなかつたかということである。もつともこの点については小論の駁論中に諸雜事記の天平十九年十二月条に、諸別宮も神宮と同じように遷宮された、しかもこの時に廿年一度の式年制が別宮にも定められたとあるのを引いて、この時は遷宮の規模が拡大されたのであるからそれに応じて斎宮寮も拡大整備されたのであらう、と間接的に直木氏に答えておられる。従つてこの記事がもし正しいものとすれば第一の疑点は氷解するのであるが、前にも言及したように、諸雜事記の史料批判そのものが不十分である現在において、直ちにその説くところに盲従するわけにはいかない。

いま一つの疑点はこの時の斎宮寮の人事についてである。八月壬寅に寮の長官となつたのは従五位下路真人野上であつた。ところが彼は僅か一年後の天平十九年九月丙申には大監物に転じている（続紀同上条）。続紀には脱漏が多いが、それでも斎宮頭（又は長官）任用記事は十四例を数えることができるが、その中で彼の如き短期の在任のものは見当らない。だか

らおかしいというのではないが、彼の転任の時期が遷宮実施年に當つていることに注意しなければならない。しかも田中氏のいわれるところに従えば遷宮は九月に行われるのであるから、路真人野上は遷宮の直前において、少なくともその施行最中において他に職を転じたことになる。即ち遷宮にあれほど密接な関係があるといわれる斎宮寮が、その責任者の交替を最大任務遂行中に行つたことになるのである。廿年前に司からの昇格をみた斎宮寮を再度新設の如く記す続紀が——その整備の理由がもし氏の如く遷宮のためであるとしたならば——この人事異動をのせることはまことに不思議なこととならねばならぬ。直前ないしは施行中に異動すべき理由が発生したとすれば、おそらく野上の失策によつてと想像するのが自然であらう。がそうとすれば彼の転任は左遷の意味を持たなければならぬ。しかし大監物は周知の如く中央官衙の中務省の重要な職で、位階も従五位下相当でありまず斎宮頭と同等のものであるのが普通であらう。また遷宮が無事行われたための論功行賞の転任とすれば——時間的にみて直前あるいは最中にそのようなことがあるとは決して考えられないのだが——栄転となる。しかしこれもさきにいつたように、地方から中央へ戻つたということを除けば別に大したことではない。ことに後の例であるが、正五位上相当官の大宰少式に任ぜられた従五位下笠朝臣名麻呂（続紀宝龜八・十・辛卯条）には比ぶべくもない。むしろ治部少輔に転じた従五

位下安倍朝臣草麻呂や(同書延暦二・十一・乙酉条)攝津介になつた外従五位下引田朝臣虫麻呂(同書天平十三・十二・己亥条)と同じような普通の転任ととるべきである。いずれにしても遷宮に際会したとたんの転任を説明するものではない。また遷宮のためわざわざ斎宮寮を拡大したほどであるならば、その直前ないしは最中に責任者が交替したのだから、直ちに後任を任命するのが当然である。統紀にこの記事のないのは脱漏とも考えられるが、とすれば肝心の遷宮のときに、長官の転任先だけをのせて新任者を脱漏したとしなければならず、これは前年にわざわざ「置斎宮寮」とまで誤記した統紀の書きさまを、氏のように解する限りまことに矛盾したことになる。

このように天平十八年の統紀の記事は、天平年間における伊勢神宮の發展に伴う現象であるとするならば無理なく理解できるが、翌天平十九年に行われたという神宮所伝の式年遷宮の準備と解する限り、どうしても理解することのできない矛盾したことが種々出てくるのである。

註

- (1) 延暦十一年の臨時遷宮より数えれば十九年目となる。
- (2) 寛治四年(一〇九〇)と元永元年(一一一〇)の二回。
- (3) この時の遣使の理由については直木孝次郎氏の精緻な考察がある。私もそれに従いたいと思う。(奈良時代における伊勢神宮下ノ上) 統紀研究二卷十一号)
- (4) 斎宮寮の問題については既に直木氏が詳細な論考を発表せられ

ている(前掲論文「中」統紀研究二卷六号)。その論点の二、三とに斎宮寮設置年代について田中卓氏の反論が提出されたが(斎宮)統紀研究二卷十号)、ひきつづいて直木氏はその再反論を公にされた(前掲論文「下ノ下」統紀研究二卷十二号)。で少くとも寮設置の年代については問題が解決されたと思つていたが、拙論に対する田中氏の反論においても氏は自説を主張しておられるので、まずこの問題について私の立場を明らかにしておきたい。

直木氏と田中氏の分れるところは、前者が神龜五年に斎宮寮が新設されたとされるのに対し、後者はそれは寮の拡大整備であつて、大宝二年正月当時に既に斎宮司から寮に昇格していたのであろうとされる点である。ともに神龜五年七月廿一日の格の解釈がその分岐点となつている。問題の格は類聚三代格に

斎宮寮

頭一人、從五位官、助一人、正六位官、大允一人、少允一人、

從七位官、大属一人、少属一人、已上從八位官

主神司

中臣一人、從七位官、忌部一人、宮主一人、已上從八位官、口部

口人

舍人司

長官一人、從六位官、主典一人、大初位官

藏部司

長官一人、從六位官、主典一人、大初位官

膳部司

長官一人、從六位官、判官一人、正八位官、主典一人、大初位官

酒部司

長一人、從七位官、酒部四人

水部司

長一人、從七位官、水部四人

殿部司

長一人、從七位官

采部司

長一人、從七位官、口部六人

掃部司

長一人、從七位官、掃部六人

藥部司

長一人、從八位官

以前——勅依三件、

神龜五年七月廿一日（卷四）

とある。これが「廢置諸司事」条にあることにより、当初直木氏は齋宮寮自体の新設を意味するとされ、それ以前に統紀に現われる齋宮寮関係の記事は未公認の私称であるとされた。これに対して田中氏は、統紀大宝元年八月甲辰条に

太政官処分、（中略）又齋宮司准寮、風官准長上焉、

とあるから、大宝元年当時既に齋宮司という公認の官庁が存在しているものであり、以後統紀に現われる齋宮頭はすべて五位で寮長官の相当位であるから、大宝二年頃に司より寮に昇格していた。従つて神龜五年の格は寮の新設ではなく、主神司以下薬部司に至る十司が新しく齋宮寮の被官として設けられたことを示すにすぎないとされたのである。直木氏は再びこれをうけて、大宝元年以後の齋宮司存在の史実を認め未公認私称説は撤回されたが、齋宮頭の位が寮の頭にふさわしいのは司が寮に准ぜられたことからく

る当然の結果であつて、これをもつて寮存在の証とすることはできないと依然として神龜五年寮新設を主張されたのである。拙

論への田中氏の反論は直木氏の再反論以後に公にされたものであり、その中でも前記の論をくり返しておられるから、おそらく直木氏の再反論を認められないのであろう。ここで両氏の論争を再びくり返す必要はないが、思うに田中氏の神龜五年格の解釈には無理があるようである。既に直木氏も述べられたように、司が寮の被官となることは管見の範圍内では令制にないし、かりに被官新設であつたならば、その格に寮の名称以外にその頭以下の役人の職名・相当位を出すというのは不都合である。更に延暦十九年十一月三日の太政官符には

齋宮主神司

右被_レ三大臣宣_二称、奉_レ勅、件司令外特置、未_レ有_レ所_レ管、考_二校功過、無_レ由_レ取_レ決、宜_二目今以後令_二神祇官管攝、（類聚三代格卷一、神宮司神主禰宣事）

とあるのをみれば、主神司が延暦の末年に至るまでその被官関係が未定であつたことが明瞭である。いいかえるならば主神司は齋宮寮と独立して存在していたので、おそらく他の九司も同様であつたのであろう。してみれば神龜五年の格は寮自体他の十司とともに新設された。即ち齋宮司はこの時に寮昇格を公認されたものといわねばならない。思うに田中氏は延喜式などという平安中期頃の狀態をもつて、八世紀前半の頃を律せられたのではなからうか。いずれにしても私は大宝二年齋宮寮昇格説は認めがたく、直木説に従いたいと思う。

(5) なお田中氏はここに「置_二齋宮寮_一」とあるのを、扶桑略記が齋

官寮の拡大充実を告げる神龜五年の格を誤つて、神龜四年七月廿一日条に記した事例をあてはめて考えれば容易に解釈のつく問題であると考えられているが、既に註(4)で述べたように、神龜五年格は寮そのものの設置を意味するものであるから、この論旨は通らない。思うに統紀の誤記と考えるより仕様がなないのではあるまいか。大方の御教示をお願いする。

(2) 和銅二年の遷宮

神宮所伝の和銅二年(七〇九)の第二回式年遷宮に關しては、田中氏は別に積極的な論拠の提示は行つておられない。ただ年次が廿一年目になつてのことや、古伝に明らかな疑がかけられない限り信じてよいと考えたと、極めて主観的な論を展開しておられるにすぎない。しかし年次が廿年でなく廿一年という端数になつてゐることが、必ずしも信憑性を高めるものではないということについては既に前項で論じたことなので、ここで再び述べる必要はない。

また神宮側の古伝に明らかな疑のかけられない限り信じてよいといわれるのも「式年遷宮が天平元年にまで溯つて是認されるとすれば、そのことを伝える神宮側の古伝は、頗る信用を高めた」ということが前提になつてゐる。ところが天平十九年・天平元年のそれについていくたの疑点の存することは、上來詳しく述べたとおりである。そしてこれらの疑点の解消しない限り氏の論は成立し得ないであらう。してみればそのことを伝える神宮側の古伝は、なにも信用度を高めたと

いうことにはならないのである。従つて諸雜事記と例文に伝えるのみの和銅二年の式年遷宮は、田中氏と同じ論法でもつて、信憑性の薄い諸雜事記等でしか証し得ない限り、一応これを疑うのが歴史学の常道であるといひ得ると思う。

三、持統朝起源説の吟味

奈良時代における遷宮は、上記のように天平十九・天平元年・和銅二年のそれにいくたの疑問が存するのであるから、残るところは第一回といわれる持統天皇四年のものとその立制起源だけとなる。ところで通説にいう天武朝に式年立制があつたというのは、田中氏自身もこれを否定されるのであるからもはや再論の要はない。従つて持統四年の遷宮と氏の提唱された朱雀三年即持統二年起源の吟味をすればよいこととなる。しかし氏によれば朱雀三年立制が事実であるからその翌々年に第一回遷宮が行われるのは当然であると、持統四年の神宮側古伝に対しては些かの検討も加えられずに従つておられる。従つてここでは主として朱雀三年立制の問題を対象に考察すれば足りるのであらう。

持統朝起源の主張はきわめて精緻であつて、主として拠られた諸雜事記の擁護論はまことに堂々たるものである。そこではいくつかの論拠をあげられてゐるのであるが、その主たるものは、まず第一に、通説にいう天武十四年説と白鳳十三年説はそれぞれ後補挿入でありまた私の誤解であるから、残

るところは諸雜事記（群書類従本）にある朱雀三年説のみであつて、私が前稿であげたところの通説は諸説紛々として一致しないとの理由は成立し得ないというのである。第二はこの朱雀三年を諸雜事記が天武朝にかけたのは後世の誤りであつて、学界の通説に従い持統二年にあてべきである。第三は朱雀三年の宣旨は後世のものでなく、持統朝に宣旨があつても不思議でない。だからその内容によつてこの年に式年立制があつたとするのが正しい。以上を主論拠とされ、以下左大臣任命の年月と太神宮の用語例の二つをその傍証とされた。立論中、私の前稿を鋭くがめられており、その叱正に従うべきところもあるが、また承服しかねる点も多い。で、おおむね氏の論拠の順に従つて吟味の筆をすすめることとする。ところで氏の考察の主たる対象となつたのは、私の前稿と同じく諸雜事記であるので、その該当条の全文を最初に掲げておこう。

天武天皇

朱雀三年九月廿日、依左大臣宣奉勅、伊勢二所太神宮御室物等差勅使被奉送畢、（傳旨、不記）宣旨狀稱、二所太神宮之御遷宮事、廿年一度應奉令遷御、立為長例也云々、抑朱雀三年以往之例、二所太神宮殿舍御門御垣等、官司相持、特破損之時、奉修補之例也、而依件宣旨定遷宮之年限、又外院殿舍倉四面重々御垣等、所被造加也、（群書類従神祇部）

まず第一の論拠について考えたい。氏は天武十四年説が後補である所以を明快に論ぜられた。私は異本太神宮諸雜事記（神宮文庫所蔵九八七号以下五種）を見る機会がなかったので、前稿においては太神宮参詣記だけを挙げておいた。しかしこれは氏の論ぜられた如く、異本の方が参詣記よりも古いからそれを代表とすべきであらう。しかも異本の文章は群書類従本よりも後と推定される論証が正しいとして、この説が朱雀三年説より信憑性がないというのは一応承認していいであらう。白鳳十三年庚寅説は例文に

白鳳十三年庚寅九月、太神宮御遷宮、（持統天皇四年也、自此御宇、定神皇統改定、歷廿年、御大伴

皇子在位時、依天武天皇之御詔也、（第廿六）

とあるのであるが、これを前稿で挙げたことについて田中氏は私の失考であるとされた。しかしこれを以て式年造替の時期を示すとしているのは、私ではなく実は通説を支持する神道史家（例えば小島鑑作教授・岡田米夫・梅田義彦氏等）であつて、私は分註によつてこれは持統朝起源を語るものだから、通説の如くなにも天武天皇の代にかかるといふ点ではすべて一致しているといふことにはならないといつてゐるにすぎない。私の叙述が不備であつたがために氏の誤解を招いたのであるが、通説は内容的にも天武起源と持統起源の二つに分れるという私の推論に対しては、持統朝説を主張される氏もおそらく異論がないと思う。ところで先に掲げた諸雜事記の朱雀三年説のみが正しい古伝とされるわけであるが、その所論は

要するに朱雀三年は持統天皇二年戊子であるところにある。

朱雀は書紀にいう朱鳥に他ならないというのは、既に坂本太郎博士の明らかにせられたところである（『白鳳朱雀年号考』史学雑誌三十九編五号）。だから天武天皇丙戌年（六八六）が朱雀元年であつて、その三年は持統天皇二年戊子（六八八）に当るといふのはその限りにおいて正しい。しかし朱雀三年が持統二年に当るといふことと、持統二年を朱雀三年と表記するということは問題が別である。いいかえれば前者が正しいからといって、後者の表記法による史料が常に七世紀末の史実を示すものとはいえない。周知の如く書紀には朱鳥の年号はあるが朱雀の使用例はない。しかも朱鳥は丙戌年一年だけであつて書紀には継続していない。他に継続したように記されるものはないではないが、それらはいずれも奈良時代の文獻である（斎藤勸氏「王朝時代の隠陽道」十章）。ところで朱雀の年号の現われるのは、先学に従えば熱田太神宮縁起が最古であつて（斎藤氏前掲書）、その時期は貞観寛平年間（九世紀末）といわれている（坂本博士前掲論文）。これらをもつてみれば年次を朱雀と表記するものは、九世紀末以後少なくとも平安初期を降ることがまず推定されるであらう。そもそも諸難事記の第一次の成立が、奥書に従つて清和天皇頃の徳雄神主の頃にあり、彼が古記録によつて編述したのが事実で、それが最後の成立をみた寛治七年（一〇九三）頃まで大した変化

をみせなかつたものとするならば、原資料に従つて持統二年戊子とあるか、あるいは奈良時代頃の資料によつたのであれば朱鳥三年とあるのが当然ではあるまいか。それをことさらに朱雀三年と記しているのは、当時は前述の如く僅か熱田太神宮縁起しか朱雀年号は認められず、朱鳥＝朱雀は一般的風潮といえないのであるから、徳雄神主がもし取えてそれをしたものとすれば、神宮の中心的人物としてもまた古伝を尊重する神主職としてもまことに不見識であるといわねばならない。それよりはむしろ、私にはかつて福山敏男博士が壬申年を元年として天武二年にあてられた如く（『神宮の建築に関する史的調査』二一四頁）、扶桑略記等の朱雀年号使用法が一般化された十一世紀頃に作為されたものと考えるのが自然のように思えるのである。要するに、朱雀三年の年次のみをとりあげてそれが持統二年に当ることをいかに立証しようが、その条下に記されている記事そのものの成立が前記のように九世紀末を遡り得ないのであるから、それでもつて直ちに七世紀の史実を示すものとはならないのである。そのためには朱雀の使用例が更に古くから慣用されていたことが明らかにねばならず、ことには記事内容そのものの信憑性が諸難事記以外から——既知の信じ得べき史料によつて——証されることこそが必要なのである。しかし氏の論証においては年次の決定こそまことに明快であるが、遺憾ながらその結論を直ちに記事内容に適用しておられるのであつて、その間に経べき批

判が欠けているのではなからうか。氏は「朱雀三年」という年次のみを明確に押え……それ以上のことは、朱雀¹¹朱鳥の學説に従つて、朱雀三年を持統天皇二年（戊子）と決定すれば、それでよい筈だ」といわれるが、決してそうではなく、私には実は問題はこれから展開されねばならないと思われるのである。

この意味から、諸雜事記の朱雀三年の記事を含む文武天皇条全体の吟味は少なくとも必要であらう。この条は白鳳二年壬申云々・即位二年癸酉云々・或本云・又或本云・白鳳四年甲戌云々・朱雀三年云々・宣旨狀称・抑朱雀三年以往之例云々とおおよそ八つの事柄を記している。白鳳二年壬申の項は、いわゆる壬申の乱に際して天皇が伊勢神宮に祈願をささげ、皇子をもつて神宮の御杖代とすると誓つた。その感応で勝利を得たというのである。このことは書紀にも朝明郡の迹太川の辺りでアマテラスオオカミを遙拜したとあり（天武元・六・丙戌条）、大来皇女を斎宮に卜定している記録（天武二・四・己巳条）と大体照應する。神宮感応のことも諸雜事記の性格から考えて深くとがめるほどでもない。ただ壬申を白鳳二年にあてているのが問題で、これによれば天智十年辛未年が元年に当る。天武白鳳年号を記す諸文献は、ほとんどが壬申元年か癸酉元年であつて本書のみが辛未元年である。かかる点から本項は古記録に基いて書かれたというよりも、おそらく書紀に内容を合わせて作られたものではないかと疑われる。即位二

年の項は、天皇が自ら神宮に参拜祈願したというのである。これは書紀にはない。書紀にないから直ちに史実がなかつたとはいわれないのであるが、上記のように書紀は天皇の遙拜すらかかっているものであるから、親拜があればそれを脱漏することはおそらくないであらう。それをここでは「九月十七日」と目付まで入っている。これらの点からこの項にも疑問がもたれる。或本云と又或本云は、前者が天皇が神宮に参着したとし、後者は飯高郡から遙拜して歸つたという。年ははつきりしないが、おそらく二年のことと思われる。ところで前者の不可なることはいうまでもない。後者はこれも書紀にないが、だといつて積極的に否定する根拠もない。しかし諸雜事記は「件記文兩端也、^{紀本}」としているところを見ると、編者自身も迷つておる。また日本紀に拠つたと明記しながら紀にはその事実を記さないものであるから、この両項もやはり無条件に信ずるわけにはいかない。白鳳四年甲戌の項は、多基子内親王が神宮に参入したというのである。多基子内親王は天武天皇の皇女多紀皇女であらう。とすれば多紀皇女等が伊勢神宮に赴いたのは朱鳥元年で十二年の錯誤がある（天武紀同年四・丙辰、五・戊申条）。その他に十市・阿閉の兩皇女も参入しているが、それは天武四年乙亥で一年くい違ふ（同書同年二・丁亥条）。甲戌と乙亥の相異を無視して四年の二字を合わせても、人が多紀と十市等と一致しない。更にこの項においても「秋九月十三日」と参入の日時まで明記している。

これらのことから考えてこの項も信憑性がないとして大過ないであろう。朱雀三年の項は、左大臣宣奉勅によつて神宮に神宝使が出されたというのである。後文で詳細に述べるように、神宝と遷宮との関係からみてこの年に神宝使が發遣されたというのは矛盾にみちている。抑朱雀三年以往之例の項は、一読してわかるように（全文は本節の初めに掲ぐ）徳雄神主かあるいはそれ以後の神主の文である。従つて平安中期以後のものであるから、ここでは考慮の外に置く。このように考へてくると、天武天皇の条はすべてにわたつて疑問がもたれるので、その信憑性は著るしく薄いものといわねばならない。してみれば、宣旨狀の項にどのような評価を下すべきかはいわずとも明らかであろう。しかも田中氏によれば「朱雀三年」から直ちに「宣旨狀」につながるという。そしてその内容は正しい史実だとする。私の史料批判にしてもし大過ないとするれば、氏のこのような結論は決して生れないはずである⁽³⁾。

以上で田中説に賛同し得ない理由の大体を述べたのであるが、氏の論拠はそれ以外にもあるので一応それらに触れておきたい。まず諸難事記が朱雀三年を天武朝にかけたのは後世の誤りであるというのである。そして何故に持統朝であるべき朱雀三年が天武朝にかけられたかという理由についての氏の推論は精細をきわめている。しかしかりにその論旨に従つたにしても、これが問題の解決にどれだけの寄与をなすのであろうか。さきに述べた如く年次のことやその排列順序の考

証がいかに重ねられたとしても、そのこと自体には宣旨狀の内容を正当化せしめる働きは薄いのである。諸難事記の記載順序がまちがつており、またその理由が推定されてもそれはそれだけのことであつて、記事の内容の史料批判がなされない限り直ちにそれが正しいということにならない。従つてこの論拠を認めたにしても、別に卑見を改める必要はないと思ふ。

次の論拠は持統朝に宣旨があつても不思議ではない。従つてその内容によつて朱雀三年に式年立制があつたとするのである。私は前稿において宣旨の用例、形式は平安初期に成立したものと思われ、少なくとも奈良中期以前には溯らないであらうということと、「宣旨狀」という用語はないという二点からこれを疑つた。しかしこれは私の考えがまだ未熟であつたので汗顔の至りである。「宣旨狀」は正に田中氏のいわれる如く「宣旨の狀」と読めば問題はない。またその用例にしても懇切な御教示に接したが正倉院文書・養老令・書紀等にあるのであるから、それらの成立年代から推して養老年間はこの語が用いられたことは明らかである。令や書紀の「宣旨」は文書の形式からのそれではなく「ミコトノリ」というのを漠然と表現したもので、奈良中期以後のものと異なるものとも考えられるが、それにしてもとにかく「宣旨」なる表現が八世紀初頭行われていたことは認めていい。持統朝はそれより溯ること約卅年であるから、若干年数は多すぎると思うが、

この語が使われる可能性はたしかにあるであらう。従つて卑見はこのことに關する限り正に撤回すべきである。ところで田中氏の論は卑見の反論に終始されるだけであつて、主旨の内容についてあの精緻な考察を注いでおられないこと前の論拠の場合と同様である。主旨の語が持統朝にみえることが決して不審でない——氏は当然のようにいわれるが、嚴密にはその可能性だけであるから私はかなり消極的に考えるべきものと思う——ということが、直ちにその主旨は當時のものであるということになつてゐるのである。もし氏の方法論が許されるところならば、後世の文献においても術語さえ妥当ならば、それに含まれる記事はすべて当該時代の史実を示すものといふことになる。ここにおいても私は第一・第二の論拠についての吟味において導かれた結論と、同じ結論に落着かざるを得ない。

この論拠の後半の部分である、朱雀三年の宣旨狀の内容によつて式年立制はこの年であるといふことについて考えてみる。ところでかりにこれに従つた場合、次のような不可解なことが生じてくる。即ち諸雜事記のこの項は宣旨狀の前文に「依左大臣宣奉勅、伊勢二所太神宮御宝物は差勅使被奉送畢、^{（傳目不）}」と明記している。これは朱雀三年に宣旨狀の出されたことと同時に神宮への神宝奉納があつたことを示しているのである。ところで遷宮のための神宝奉納は遷宮と同時に行われるのが原則であつた。⁽³⁾とすると朱雀三年の神宝奉納は

同時に遷宮も意味する。しかし諸雜事記によると第一回遷宮は持統四年であつて、その間に二年の差違があつて一致しない。従つて朱雀三年の神宝奉納、持統四年の第一回遷宮の兩者とも正しいとすれば、この時は新殿造立の見ないうちに神宝だけが先に納められて、遷宮の時にはその奉納がなかつたといふことになる。これは後の例——平安初期であるが、神事という性格から考えてこれ位の期間で大きな変化がないとしてよい——とも異なるし、少なくとも常識的には理解しがたい。また第一回の遷宮に限つてかかる特例があつたと考えられないこともなからうが、なぜそうしたのかという積極的な理由が推定されない以上、これも單なる空論にすぎなくなる。つまりこの二つの所伝はどちらか一方が誤つてゐるか、あるいは兩方とも正しくないかのいずれかということになるであらう。兩者とも誤つてゐる場合は、問題なくこの所伝を否定し去ればよい。どちらか一方の間違つてゐる場合であるが、かりに朱雀三年条が誤りであれば少なくとも持統四年の遷宮は式年のそれではなく、従来からの破損に従つての修補によるものとなつて、いま問題としてゐるものと全く性格の異なるものとなる。また持統四年の所伝が誤りであれば、朱雀三年の式年立制は無意味となる。そして持統四年を一回として以下二・三・四と数える神宮所伝の信憑性は著るしく動搖せざるを得ない。いずれにしても、兩者とも誤つてゐる場合と結果において同じものとなるのである。このように朱雀三年

の項に換る限り、神宝奉納と遷宮との間に矛盾した關係を招来することとなるのであつて、この所伝の正当性が疑われることになるであらう。

もつともこの兩者の矛盾については田中氏も認められ、以下のように解釈された。つまり「依左大臣宣奉勅云々」は、元來は持統四年の遷宮の条下に記さるべきものであつたのが誤つたのである。従つてこれは持統四年の遷宮の記事と朱雀三年の式年制定の宣旨の記事が錯亂したもので「九月廿日」の四文字もおそらく宣旨の月日でなくて遷宮のそれであらうとされた。一応、兎事に矛盾を解決しておられるわけである。しかしその論旨は朱雀三年条の解釈によつて式年立制と第一回遷宮を立証するといふのではなく、朱雀三年の式年立制と持統四年の遷宮が眞実であるといふことを前提として、いいかえれば最初から神宮古伝が正しいものとして、そのうえでこれに適合するように矛盾の解決に當つておられるのである。そもそも氏の論に従つて諸雜事記の文を書き直すと

朱雀三年「○、○、」宣旨狀稱、二所太神宮之御遷宮事、廿年一度處奉令遷、立爲長例也云々、(○印の箇所は錯亂として持統四年条に讀つた部分)

即位四年庚寅、「九月廿日」太神宮御遷宮、「依左大臣宣奉勅、伊勢二所太神宮御宝物等差勅使被奉送畢、（白鳳二

となる。これをみてもわかるように、いかに大幅に且つ自由

に文章を入れかえておられることであらうか。それも畢竟すると、氏自身も認められた神宝奉納と遷宮が同時でない記事のつじつまを合わせられんがためである。氏は私が前稿において日本後紀弘仁三年六月辛卯条(後節において再び触れる)の解釈として、その中に現われる「積習爲常」を、時間的に久しいという字義通りの意味でなく、おそらく政治上の必要から他の三神に対して實質の伴わない名目上の待遇に終らせるための神祇行政當事者の苦惱が、ことさらにかかる誇張の語を使わしめたのではあるまいかと考えたのに対して、「もしこのように、自説を任意に前提として、それに都合の

悪い史料を容易に別の意味にすりかえてしまふというような方法が許されるならば、なるほど一切の論証は天馬空をゆくがごとくであらう」と批判された。積習という、いわば形容詞的な語句の解釈についてさえもこれほど鋭く批判された氏が、一つのまとまつた史料をばらばらに分解され——それも形容詞的な修飾語ではなく、事項を語るものや年月日という客観的なものでを——その入れかえを自由に行つて全く新しい史料を作り上げられるというのは、私には少しく理解に苦しむのである。さきにもいつたようにこれほどまでに改作された理由は、神宝奉納と遷宮の年次を一致せんがためと、左大臣が朱雀三年中になく持統四年七月に丹比真人嶋が右大臣に任命されたことに合わせんがためである(氏は左は右の誤写とされる)。その他に諸雜事記のこの条は「白鳳二

年 壬申……或本云……又或本云……件記文兩端也……白鳳四年 甲戌……朱雀三年九月廿日……宜旨狀稱……」と幾種類もの資料をよせ集めたのだから、混乱が生じたものだともされている。もちろん後世の編纂物に錯簡の生ずることはままあるが、そうした一般論を直ちにここにあてはめ、その可能性をもつて決定的な論拠とするのは少しきすぎではなからうか。いずれにしても、私には氏のこの論拠も諸難事記の信憑性を高めるものとは考えられないのである。

以上主として持統朝起源説の論拠について吟味を加えてきたのであるが、その結果いずれもそれを主張する決定的根拠とはなり得ないことを大体明らかに得たと思う。ところで氏の論文では、前述のように朱雀三年の宜旨状については詳しく考察されているが、第一回の遷宮については、諸難事記の即位四年（持統一筆者註）庚寅、太神宮御遷宮、同六年、壬辰、

豊受太神宮御遷宮、

を無条件に信じてそれに従つておられる。朱雀三年の宜旨を疑わしいものとする私見からは、この所伝も直ちに否定してよいのであるが、この所伝にはこの所伝として信じ難い点がある。それは第二節でもちよつと触れたように斎王に関する問題である。田中氏は斎宮と遷宮との間に重要な関係があつて、その官衙の整備拡張によつて遷宮実施の史実が証明されるとしておられるのは既述のとおりである（第二節参照）。この論に従つて持統朝の第一回遷宮をみると、まことに矛盾し

たことにぶつかる。即ち舊紀によれば天武天皇二年（六七三）四月に定められ同三年十月に神宮に発遣された大来皇女は、朱鳥元年（六八六）十一月壬子、持統天皇の代になつて

率伊勢神祠皇女大来、還至京師、

と直ちに召喚されている。天皇の代がわりに斎王の召喚される例は多いからそのこと自体は別に不思議ではないが、以後新たに斎王発遣は史上に見えない。そして次の文武天皇の代になつて、二年（六九八）九月丁卯に

遣当香皇女待子伊勢斎宮、（統紀同年同月条）

と再びその姿を現わすのである。これに従えば朱鳥元年から文武二年までの十余年間、斎王は空席であつたことになる。しかも持統朝起源説のいう式年立制の朱雀三年も第一回遷宮の持統四年もともにこの斎王空席の期間中であつたわけである。これは遷宮実施の立役者たるべき斎王の空席のまま実施されたということになつて、氏の斎宮論からみるとまことにおかしいことといわねばならない。斎王が天皇の文字通りの代理であり、神宮が皇室の最高の氏神であつて、遷宮がその神実の移動であつてみれば、この神事に斎王が関与しないというのはたしかに理解できない。また天皇が直接伊勢に赴かれたという伝えもないのである。このようにみると、斎王がいけない時に遷宮が——しかもそれは式年立制後の最初の遷宮であるから、最も重要な意味があるはずの——行われたという諸難事記の所伝がはなはだ曖昧なものになつてくるで

あろう。(神宮信仰の側に立つて考えれば考えるほど不可解きわまることになる)。

これに対して、書紀なり統紀に斎王發遣の記事の脱漏があつたのだという考え方もあろう。しかしこれもあまり適切とは思えない。まず統紀であるが——かりに脱漏があつたとしてもそれは持統朝ではないから問題にはならないのだが——文武二年九月は天皇の即位一年後である。前後の例から推して天皇の代がわりに新斎王の任命をみているから、この時の当斎皇女はおそらく文武天皇最初の斎王であつて、それ以前に斎王が發遣されていたとするのは時間的にみてどうも無理である。従つて統紀の文武二年までの記事に脱漏はなかつたとしていいであらう。

ところで書紀であるが、朱鳥元年の大采皇女召喚から持統四年までは四年間であるから、この間に記事の脱漏があるということは一応考え得る。しかし更に考えるに、斎王は崇神垂仁紀はしばらく措き、景行紀以後しばらくみえる。そして酢香手姫皇女が用明・崇峻・推古の三代にわたつてその地位にあつたことがわかるが、以後文武二年までその任命はない。この天武朝における斎王任命が推古朝以前のものの復活であるというのが通説であり、天武天皇の敬神思想の發露であると従来の神道史家のとくに強調するところでもある。復活か否かは一応別問題として、大化改新以後においては、天武天皇の代になつてはじめて斎王が任命されたというのは事

実であらう。そして天武紀には

欲遣侍大采皇女于天照大神宮、而令居泊瀨斎宮、是先
潔身、稍近神之所也、(二・四・己巳条)

大采皇女自泊瀨斎宮向伊勢神宮、(三・十・乙酉条)

と、單なる任命でなく、發遣までの手続きに至るまでを伝えているのである。更にこれだけにとどまらず、斎王でもない十市皇女・阿閉皇女(天武四・二・丁亥条)や多紀皇女・山背姫王・石川夫人等(朱鳥元・四・丙辰、同年五・戊申条)の伊勢參宮や歸着のことまでも記しているのであるから、いわんや斎王のことに關してはまず脱漏はないものとすべきであらう。だから朱鳥元年十一月召喚された大采皇女は、天武天皇の代を通じて在任したものとして誤りあるまい。このように斎王については、書紀の編者自身重要視しているのであるし、ことには天武天皇が大化以後はじめて定めたものであるから、持統朝になつて急にそれを伝統的なものだから別に意識に上らず、従つて記録しないようになったものとはちよつと考えられない。しかも時間的には更に經過している統紀にも、斎王のことはひきつづいて記録されているのである。このように考えてくれば、持統朝に限つて斎王のことを脱漏したとするのは不自然であつて、やはり書紀や統紀の記載どおり、朱鳥元年十一月以後から文武二年に至るまではなんらかの理由で斎王の任命がなかつたものとするのが妥當であらう。このように書紀の記事に脱漏がないとすれば、斎王空席中に遷宮が

行われたという諸雜事記の所伝は、田中氏の論に従つてまことに不自然なことになるのである。しかも斎王と遷宮の関係についての氏の見解は正しいものと思うから、その所論に従つて、斎王空席中に第一回の式年遷宮が行われるということはずまずないものと考えていいであらう。

註

(1) 坂本博士前掲論文。またこの点から「二」は「元」の誤写ではないかとも思われるが、甲戌を白鳳四年としているところからみるとそうではない。

(2) 後世の編纂物において「年次」がある時期に比定されるからといつて、その年次の記事内容を直ちにその時期の史実とするのは危険な態度といわねばならない。

(3) 純日本後紀嘉祥二年九月丁巳条「遣左少弁從五位上文案朝臣助雄等一奉神宝於伊勢大神宮、是廿年一度所奉例也」類聚国史卷三伊勢太神「貞觀十年九月七日、遣從五位下守右少弁藤原朝臣千乘、左大史正六位上刑部造真鯨等於伊勢太神宮、奉太神財宝、是隔廿年一所造也」

(4) 氏の史料操作には、既知の史実に合わない史料があると、それをいろいろに作りかえて既知のものに合わせる点があるのではなからうか。とにかく「積習」に対する氏の批判はたしかに私の盲点をついているが、その叱正に対する補考は後節で触れる。これについて直木氏は、文武朝に至つて再び伊勢神宮の祭祀に対する関心が高まつて来たことを示すものであらうといわれた（岡氏前掲論文「中」統紀研究二卷六号）。これは一見解とすべきであらう。

四、天平神護二年の遷宮

以上、未熟な推論を重ねたのであるが、私が持統朝式年立制ならびに持統四年の第一回より天平十九年の第四回までの遷宮実施説に与し得ない所以は、おおよそ明らめ得たと思う。残るところは天平神護二年の遷宮の問題と、桓武朝起源そのものについての私見に対する批判の検討だけとなつた。ところで私見に対する批判はいろいろの点から論及されているが、私の最も根本的な誤謬と指摘された日本後紀弘仁三年六月辛卯条についての氏の見解が、そのまま天平神護二年遷宮実施の最大の論拠になつてゐる。したがつてこの遷宮の有無を吟味すれば批判に対する答の一部にもなるかと思う。

天平神護二年（七六六）に遷宮が行われたという氏の論拠は二つあつて、その一は神宮側の古伝を疑うべき根拠は見出し得ないというのである。しかし何故に疑うべき根拠がないのかということについては少しも言及しておられないのであるから、客観的にみれば古伝に無条件で従われたともいえるのである。この態度については度々述べたのでここではくり返さないが、これに与し得ないことはいふまでもない。

次の論拠は前記のものであるが、問題の箇所は日本後紀に神祇官言、住吉香取鹿嶋三神社、隔廿箇年、一皆改作、積習爲常、其弊不少、今須除正殿外、随破修理、永爲恒例、許之、（弘仁三・六・辛卯条、傍点筆者）

とある。これは佳吉・香取・鹿島の三神社が九世紀初頭廿年一度の式年造替を行つたことを示すものである。そして文中「積習為常」とみえるところから、廿年一度改作の制が非常に古くから行われていたとするのが普通であつた(例えば朝日新聞社六国史頭註佐伯有義博士説)。しかし私は前稿において、積習を文字通りに解する必要はない。従つてこの記事は神宮の式年が延暦初年にはじまつたとする私見と抵触しないと述べた。これに対して田中氏は猛烈な反対をされるのである。即ちこの弘仁三年(八一二)を式年としてその前回は延暦十二年(七九三)に当る。しかし「積習」とあるのだから少

くとももう一回前の宝龜五年(七七四)にもなければ神祇官の官上は意味をなさない。しかも佳吉神社の式年遷宮が宝龜前後に施行された事実がある。してみればこれら三社より社格の高い神宮が、それ以後の延暦初年にはじまつたとは史家の常識からは考えられない。そうすれば延暦四年の廿年前たる天平神護二年は宝龜頃から數年前にすぎないから、この年に式年遷宮があつたというのは当然であらう。というのである。これは正に拙論の盲点をついた論であつた、日本後紀を字義通りに解する限り氏の見解が妥當であらう。

そもそも日本後紀の文は佳吉等三社の式年の起源を示すものでなく、弘仁三年またそれ以後に実施することを語るものである。だから起源は当然この年以前に求められることは私も前稿で触れておいた。従つて田中氏と分れるのはそれ以後

の解釈である。思うに氏の主張は「積習」の意味と宝龜前後に佳吉神社の式年遷宮があつたということに基いている。そして後者の論拠とされたのは興福寺略年代記・東寺王代記・一代要記・興福寺年代記・伊呂波字類抄であるが、これらの文献は最古のものでも平安末期を溯らないことはいうまでもない。そして氏自身も認められる如く各説各様である。従つて嚴密な史料批判のうえよるべき性質のものであるから、これら數世紀後の編纂物にあるからといつて直ちにそれを事実とすることはできない。

このようにみてくると「積習」だけが唯一の根拠となる。氏は「積習」とあるからは必らず二回以上行われなければならないとされるのであるが、一体詔勅や上奏文に類するものでてくるかかる修飾語的なものを、それほどまで嚴密に解さねばならないのであらうか。かつて白鳳朱雀年号の問題について、日本後紀の「飛鳥以前、未有年号之目」、難波御宇、始顯大化之祚、爾來因循歷世、至今是用(弘仁元・九・丙辰条)の詔が論議の中心になつたことがある。そして天武白鳳説の有力な根拠であつたのはこの詔にみえる「因循歷世」の語であつた。それに対して坂本博士は「詔の文章は、文勢上の要求から只大体をのべて、特に詳細な説明を省いたに外ならなく、これに向つて刻明な解釈を施すのは大人氣ないといふべきではなからうか」と断ぜられ、もつて今日の定説を導かれたのである(前掲論文)。この考え方はここにおいても適用

して差支えないものと思う。即ち私の前稿で述べた意は「積習為常」の四文字を白髮三千丈式の修飾語と考えたにすぎない。⁽³⁾これに対して氏は見解の相異と反論されるかもしれない。しかし私の考え方が氏を納得せしめなかつたように、氏の論拠も私見を打破する積極的な立証力はないのである。従つて私には前説を撤回する要はまたないものと考ええる。

註

(1) 強いて求めるならば、諸難事記の第一次の整理は徳雄神主によるといわれる。彼は九世紀末の人であるから、八世紀末のことでも妥当性が認められるということなのだろうか。しかしこれは余りにも安易な考え方であつて、時間的にみても一世紀以上の差があるのであるから、やはり厳密な史料批判が必要とされるであらう。

(2) 田中氏の論文においてはこれらの諸書の信憑性については全く触れておられない。また管見では、これらの書の奈良時代の記事は信ずべきものとの論のあることを知らないから、これらを基礎として事実と認定するのは危険であらう。

(3) この神祇官言上の肝心の点は、神宮とならんで皇室はじめ中央大貴族層の思想的支柱であつた住吉以下の三社が、何故に平安初期になつて、國家經營の対象物たる程度を薄くせしめられたかということにある。私には「積習」の如き一形容詞の問題は枝葉末節と思えるのである。

五、桓武朝起源再論

以上私は自説の再検討の意味も含めて、新たに反論の形で

提唱された田中氏の持統朝起源説をもととして吟味を加えてきた。その結果、信じ得べき記録をもととしては延暦四年(七八五)を最初の式年遷宮の行われた年とする私見を更に確信するに至つたのである。従つてこれに先立つて延暦初年にその立制があつたと推定する卑見を訂正する要はないであらう。しかし前稿においてはその間の考察にまだ足りないところがあつたので、ここでそれを補つておきたい。

まず第一は式年立制が延暦儀式帳や統紀に記載されてないことについてである。もし延暦初年に式年立制があつたという私見が正しいとすれば、延暦儀式帳や統紀にそのことが記載してありそうなものである。しかし周知の如く両書共にその記事のないことは正に私見の致命的な欠点といわねばならない。しかしそれにはその充分な理由が推定されるのであつて、特に延暦儀式帳に記事のないこと、また記事のないことが逆に私見を傍証するであらうということについては、前稿において詳しく触れておいた。その見解は今も変わらないのでここで再述する要はないと思うが、統紀の記事脱漏については考察を加えておかなかつた。これは田中氏も指摘されたとおり確かに小論の不備であるので、ここではその補考を附加したい。

田中氏は統紀の脱漏について「恐らく延暦当時において、一般にそれ程意識的に、重大な意味を以て考えられていたのではあるまい」と考えておられるが、これについては原則的

に私も賛成である。しかし氏はその理由として「それは、むしろ関心を引かないまでに制度自体が既に一つの伝統と化していたためであるまいか」と挙げておられるが、これは大いに問題のあるところであらう。

一体、私は通説にいう持統四年以後数回の式年を否定するが、それは廿年一度という式年を否定するのであつて、選宮自体を否定するのではない。式年の有無にかかわらず、選宮のあつたことはこれは当然のことである。また伊勢神宮が今日いう意味における如き神格と地位を得たのはかなり後代のことと思われるが（直木孝次郎氏「天照大神と伊勢神宮の起源」古代社会と宗教所収）、神社そのものは大化以前から存在していたであらう。従つて律令時代に入つてからも延暦年間以前において実際に選宮が行れたのも事実で、おそらくそれは数回に及んだかもしれない。そしてその選宮はおそらく存立に耐えぬまで建物が大破した後に行われるというよりも、むしろある程度の損傷あるいはある程度の古さになつたから実施されたものではあるまいか。神社建築の方からみてもことに神宮の如きは仏教寺院等とは違つて、腐朽度の急速に進むものであることは容易に想像される。また七八世紀の頃は国家がそれに応じて容易に修理し新殿を造営し得る力を所有していたわけであるから、むしろ想像以上に選宮が行われたかもしれない。これらの場合、経過年数の相異、材料の不同とか氣象条件の変化などによつて損傷度等は一致しなかつたであらうが、

うが、おおよそどれ位の年数で新殿が造営されるようになったかということには、それほどの大差はなかつたのではあるまいか。もちろん上記のことは私の臆測であるが、そう思わせる理由もあるのである。

そもそも式年が廿年に決つたというこの年数について、何か特別の意味があるということは管見では古代の記録において見出し得ない。後世の神道学者や神主等の中でそれについて説をなすのがあるかもしれないが、それはこの場合問題とするに足りない。こういうところから考えると、この年数は建物の耐用度——もちろんそれは神宮として儀式その他の儀容を兼ねるに充分なという意味で、建物そのものといふのではない——について過去の経験からおおよそ作り出されたものではなからうか。いいかえるならば全くの不定年数で過去の選宮が行われていたのではなく、少なくとも奈良時代以降はそれほど大差のない年数を距てて実施されていたのではあるまいか。しかもその年数とはおよそ廿年前後のものであつたのではなからうか。つまり上記のこととは關係なしに先に廿年という年数を定めて、それから選宮をするという形で式年立制があつたのではなからうかと思ふのである。だからこれは同じ桓武天皇の治政に出るものといつても、内外文武官の員外解却（統紀天應元・六・戊子朔条）關所の廢止（同延暦八・七・甲寅条）漢神信仰の禁止（同延暦十・九・甲戌条）等のように全く新しく制定するとか、または過去のことを否認すると

いつたものとは性質の異なるものと思う。従つて式年立制が延暦初年にあつたにしても、それほど事新しく響かなかつたのではあるまいか。統紀の脱漏したのは式年が伝統化されていたからではなく、上記のようなことが原因であつたのではないからかうかと思うのである。

この推論に対して、それならば「この立制が律令体制の弛緩に対処する重大な意義をもつもの」という前見と矛盾するではないかと反問されるかもしれない。しかしこれは誤解であつて、前稿をよく読んでいただければ私がそんなことをいつておらないことはよく了解されるであらう。私は式年立制だけをとりあげてその意義づけは決してやつておらない。式年立制にかぎらず、官国幣の区別制定や斎宮寮史生増員、神事に関する古代的刑罰の整理等いわゆる神祇制度の整備に類するものは、それ自身として個々にいかに考究を加えても安当な意義把握が不可能であるということを強調しておいたのである。いいかえるならば上層部から発意されたかかる改革や整備は、たとえそれが神祇制度に關することであつてもその範囲内でのみ意義づけられるべきものではない。ひろく桓武朝の関連業績を綜合しその一環の神祇政策として考えるべきである。しかも桓武朝の政治が律令制を再び新時代の基本体制たらしむべく、大きく変質せんとしつつある社会の實情に則ちせんとした政治理念の具体化と把握される以上、式年遷宮の立制もそれ自身としては大きな意義が附加されるの

ではなくして、桓武朝の政治刷新の一つの象徴とせられる限りにおいて、はじめて意義をもつものといふことができるであらう。これが私の前稿で述べた式年立制の意義のすべてである。従つて田中氏のいわれる如き意味でこれの重大性を認めたのではないのである。

たとえ統紀に脱漏するほど時人に事新しく響かなかつたにしても、慣習に従つて毫もさしつかえがなかつたと思われる遷宮の年数を、ともかくも一定の年数に制定したということは、やはり桓武朝の政治理念の発露と考えざるを得ない。そしてこの理念が上層部から発現されたものである以上、狂瀾を既例に倣さんとする苦惱の一の象徴と推定するのが当然ではあるまいか。

以上まことに無難な論考を重ねたわけであるが、通説にはどうしても左袒することができない。また田中氏の御批判で教えられるところが非常に多かつたのであるが、その持統朝起源説にも賛同し得ないのは遺憾である。奈良時代の遷宮についての神宮古伝の解釈ならびに桓武朝立制の意義についての卑見は訂正の要がないものと思う。しかし私は通説は全くの虚構であるとの考えは変らないが、桓武朝起源の私見は必ずしも固執するものではない。現在のところこれよりほかに考えようがないから提出した文字通りの試見であつて、おそらく未熟な誤りが多いことと思う。後学への叱正を垂れられんことを切に願う次第である。(一九五六・一〇・一稿)

(1)

また何故に平安中期頃から通説にいうようなことが神宮関係の諸書に見えはじめたのであろうかということについては、前稿の「後記」で述べた以上にまだ考が熟しておらない。いずれ改めて御叱正を仰ぐ機会もあらうかと思う。